

## Evening Entertainment

評

大石将紀 サクソフォン×邦楽器×現代音楽プロジェクト #2  
サクソフォン×和太鼓、箏



写真・堀田力丸

サクソフォンという楽器は、運動能力が高いこともあって、誰でもそれなりに「らしく」なってしまうところがある。しかし大石将紀の演奏を聞いてるのは、「らしさ」はきっぱり距離を置いた、倫理的とも呼びたくなる姿勢である。

通俗的でハスキーな色合いは封印され、すっきりと伸びる音は、時にフルートのような、時にホルンのような風情を醸し出す。かくして我々は、サクソフォンという楽器と、もう一度、出会うことになるのだ。

今回は、邦楽器との二重奏による新作四つを中心に据えた意欲的なプログラム。

前半は、箏とのデュオ。ジュリアン・マロセナ「距離と感触」で

### 「通俗」封じた 風情の音色

は箏の絃をこするノイズと大石の繰り出すかすれた倍音が、そして小出稚子「骨」では、わざとらしいほどにのどかな箏とサクソフォンの重音が、ひたすら交錯する。いずれも、多様性ではなく、コンセプトの徹底性が身上の作品だ。

後半は太鼓とのデュオ。池辺晋一郎「葦と皮で何が出来る？」は、タイトル通り、二つの異質な楽器が、何事かをなそうとする過程。考えてみれば、当夜、正面から両者の「対話」を試みようとしたのはこの曲のみだった。こんなところには世代による創作傾向があらわれるのかもしれない。

当夜の白眉は杉山洋一の「Jéux III」。サクソフォンが長崎地方の子守歌、隠れキリシタンの歌の断片をたなびかせる背景で、太鼓が少しずつ、少しずつ音量を増してゆく。一見すると、ノスタルジックな味わいながらも、その底にはどんよりとした淀みが口をあけている。会場を出たあとも、その昏さがなかなか頭から離れなかった。(音楽評論家 沼野雄司)

——11日、東京・五反田文化センター。